動物園における植物を活用した景観づくりを考える

1. 動物園等における緑の資源化研究会

東京動物園協会では、指定管理者としての維持管理業務の中で、動物園らしい魅力的な景観づくりの方法を模索している。そこで、協会では、平成 27 年度から 30 年度にかけて「動物園等における緑の資源化研究会」と題した活動に取り組んできた。

研究会には、都立 4 園のほか埼玉県こども動物自然公園、千葉市動物公園、名古屋市東山動植物園と横浜市緑の協会の職員も加わった。研究会では、動物園における植物の活用事例を収集、評価し分析した。

その結果、動物園の緑は「野生動物の生息地の環境保全に寄与すること」、「動物園を飼育動物や来園者にとってより快適な環境にすること」と「地域の緑として地域の環境保全に貢献すること」の 3 つの役割があることが分かってきた。また、研究会は都立 4 園を対象とした実際の整備案を検討した。研究会の結論に説得力をもたせるには、こうした整備を実践し事例を積み重ねることが重要であると考えられる。

2. 動物園の緑を活用する 39 のヒント

さらに、本研究会は平成 30 年度に成果品として冊子「動物園の緑を活用する 39 のヒント」を作成した（写真 1)。この冊子は、本研究会の活動を通して得られた動物園の緑の活用事例を整理し､8 つの視点と 39 のヒントとしてまとめたものである。この冊子化の取り組みは、動物園関係者へ動物園の緑という視点を提言することを目的としている。

写真 1　動物園の緑を活用する 39 のヒント

3. 多摩動物公園での事例紹介

研究会で検討した整備案のうち、多摩動物公園での実践事例の 1 つを紹介する。多摩動物公園では、整備対象の 1 つとしてアフリカ園アフリカゾウ展示前花壇の植栽変更を検討、実施した。この取り組みでは、動物園の緑の「動物園を飼育動物や来園者にとってより快適な環境にすること」という役割のため、展示場の周囲に動物園らしさをつくることを実践した。

対象の花壇は、園芸品種の草花を植栽し年 4 回の植え替えを行う一年草花壇として管理していた（写真 2)。

そこで、この花壇をアフリカ原産の草花を用いた多年草花壇として植栽を変更した（写真 3)。また、モデルとして南～中南部アフリカにかけての特徴的なステップ気候の景観を想定した。そこで、植物材料としてアロエ・ストリアータ（サンゴアロエ）を活用した。アロエの仲間は南アフリカを原産とする種を多く含み、アフリカの特徴的な景観を構成する植物の 1 つであると考えられる。

写真 2　整備前のアフリカゾウ展示前花壇

写真 3　整備後のアフリカゾウ展示前花壇

また、比較的特殊な植物を使用しているが、面積当たりの維持管理の手間は増えていない。サンゴアロエは冬季には簡易な冬囲いを必要とする。一方で、以前までの一年草を植え替える必要はなくなった。

アロエの花壇はこれまで多摩動物公園にはなかった景観をつくりだした。さらに、この植栽は関東以北では珍しくサンゴアロエを露地で観賞できる花壇となった。異国情緒ある植物を植えることは、それだけで価値を生み出すともいえる。

4.　まとめと今後の展望

まず、動物園では来園者にとって楽しい体験をしてもらうことが、展示動物への好感、興味と関心につながる。つぎに、動物園らしい雰囲気が来園者のよい体験をつくる。そこで、動物園らしい雰囲気をつくるためにエキゾチックな植物を植える。さらに、来園者はそれらの植物と展示動物とのつながりを見出すこともできる。また、珍しい植物を植えるとそれ自体にも価値が生まれる。以上のことが、研究会の成果と現場での事例から窺える。

現在、多摩動物公園ではオーストラリア園にも手を広げて植栽変更に取り組んでいる。こうした実践を積み重ねて、動物園らしい雰囲気づくりの方法を探していきたい。

写真 4　オーストラリア園花壇